

新しい発見

動物応用科学科3年 寺内麻理絵

二十数年生きてきて、はじめて五月が好きだと知った。春の暖かさとも、夏の暑さとも違う、どこかうキウキウするような陽気だ。まだ少し冷たい空気の中にほんのりとした温かさを生みだす春の日差しと、何でもかんでもドロドロと溶かしてしまいそうな夏の日差し。その中間にあって、絶妙な温度をつくりだしてくれるのが、この五月の日差しだ。

少し嬉しくなってベランダに目をやると、鉢に植えてあったガジュマルから新しい芽が出ていた。高さ10cm足らずの小さな苗から育てたものだ。何度か植え替えをしていたら、いつのまにか、あっという間に、腰ぐらいの高さにまで成長していた。いつも冬の間に葉の数を減らしていたかと思えば、気付くと夏には濃い緑色の葉をたくさんつけている。その変身過程をいつも見逃していたので、それを発見できてとても嬉しくなった。これから大きくなろうと縮こまっている小さな小さな芽は、すでに大きく広がっている葉とは違い、きれいな、うすくて明るい黄緑色だった。大きな葉っぱと小さな芽はまさに冬の厳しさを耐え抜いてきた強いオジサンと、生まれたばかりでまだ何も知らない幼い赤ちゃんのように思えて、その小さな芽がより一層愛らしく思えた。

隣に目を向けてみると、サボテンにも変化が見つかった。体中トゲトゲチクチクしていて、年中戦闘態勢のサボテンにも、ある一時期だけその鉄壁の鎧を脱ぐ季節がある。全身

のトゲがボロボロと抜け落ちてしまうわけではないので、戦いの手を緩める、もしくは守りの手を緩めるといったほうがよいだろうか。冬の寒さが和らいで、春～夏になると、ちょうどサボテンの頭の部分に、お花の冠が出来るのだ。全身緑色のボディに、濃くて鮮やかなピンク色が、ぐるりと一周散りばめられる。その一つ一つの花はもちろんだが、冠をかぶっているサボテンというのが、実に可愛らしいのだ。しかし今回見つけたのは、その冠姿ではない。ピンクの冠になる前の、つぼみ達だった。開いた時ほど鮮やかではなく、濃くて暗い赤色のつぼみが、年に一度のサボテンの大変身に備えて待機していたのだ。これまた、いつもは見逃していた変身過程を発見することができた。

何もしなくても移り変わっていく季節やそれに対する自分の考え、身の回りの植物の変化など、意識してみないと気付かなかったり、見逃がしてしまうことが意外と多い。自分がまだ知らない、気付いていないということさえ、知らなかったり、気付いていないのだ。色々と新しい発見をして、そんな当然のことに気付かされた。なにか特別なものを観察するわけではなく、普段の生活の中から新しいことを見つけ出すのも、大きな発見であるし、楽しいことだなと思った。